

麻布大学ティーチング・ポートフォリオ

所属 教学IRセンター

職階 講師

氏名 松井 久実

麻布大学では、教育研究活動その他大学の諸活動を恒常的に自己点検・評価し、その結果を検証して改善に結び付けることにより、教育の質保証を行う観点から、各教員が『ティーチング・ポートフォリオ』を作成しています。ティーチング・ポートフォリオの構成及び更新サイクルは以下のとおりです。

1. 教育の責任・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
2. 教育の理念・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
3. 教育の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年
4. 教育の方法の改善・向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組・・ 毎年
6. 学生の学修成果向上を図る取組・・・・・・・・・・ 毎年
7. 指導力向上のための取組・・・・・・・・・・ 3年
8. 今後の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3年

1. 教育の責任

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

私の教育の責任範囲は、生理学を主とする複数学科の低学年専門科目教育、獣医学科初年次科目でのアクティブラーニングの設計と実施、全学初年次科目における学修リテラシー教育などの科目担当教員としての業務、LMSの円滑利用のための各種FDの提供、麻布大学の教育改善のためのFDの企画運営などの全学的教育支援である。獣医生理学および動物生理学の科目担当教員として15年以上の教育経験を有し、2020年から全学教務委員長補佐として麻布大学の教育支援、2021年12月より大学教育推進機構 教学IRセンターに配置換えとなり、教育方法開発センター副センター長・教学IRセンター副センター長として大学の教育推進に携わっている。

科目名	学科・専攻	単位種別	配当年次	受講者数(単位:人)
地球共生論（分担）	全学科	必修	1	574
獣医学概論（分担）	獣医学科	必修	1	135
獣医生理学実習I	獣医学科	必修	2	155
動物生理学（分担）	動物応用科学科	必修	1	162
動物解剖・生理学実習（分担）	動物応用科学科	必修	2	166
愛玩動物学II（分担）	獣医保健看護学科	必修	1	78
動物形態機能学III（分担）	獣医保健看護学科	必修	1	78
総合獣医学（分担）	獣医学科	必修	6	163
労働生理学	環境科学科	選択	3	59
労働生理学I	臨床検査技術学科	選択	4	5
労働生理学II	臨床検査技術学科	選択	4	5
獣医学特論I	獣医学科	必修	5	5
獣医学特論II	獣医学科	必修	6	4
専門ゼミ	動物応用科学科	必修	3	4
卒業研究	獣医学科	必修	6	4
卒業研究	動物応用科学科	必修	4	3
ジェネラリスト教育プログラム（オオサンショウウオの保全と地域の課題）	獣医学科動物応用科学科		1	3

2. 教育の理念

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

【2－1. 統合理念】私の統合理念として、地球環境と人間社会の共存のための自然的文化財と生態系を継承する人財の育成を掲げる。自然的文化財とは土地に定着し、風土とともに育まれ、地球環境そのものを基盤として存在する（平澤 2011）ものを指す。自然的文化財は人間がその存在を認識・記録しないと不可知である性格を有し、生態系は個人で扱えるスケールを超え超大なものである。自然的文化財の価値を発見記録すること、人類の集合知として次世代に伝えること、またその担い手を増やしていくことが理念推進のために必要であり、この理念は人類の未来のためにも有益なものと捉えている。統合理念は教育、研究、サービスの3つに結びつくが、この報告ではそのうち教育に関する部分を述べる。

【2－2. 教育理念】ヒトの動物的側面を知り多様な生物との共通点と違いを認識、言語などを用いて表現する。

私は生理学を教える教員であるが、生理学を教えることでヒトが動物界に属する一種であること、他の動物と機能の共通点があること、また同様に違いがあることを学生が認識し、言語を用いて他者に伝わるように表現できるようになって欲しいと思っている。その上で、自己の生命体としての価値を受け取り、ヒトや動物、環境の価値を次世代に伝えていく人材を育成したい。

生理学を教授する教員としての教育方針は、学生が「生きているとはどのような状態なのか」について自己を生命体として科学的観点から捉え直すことで客観視し、ヒトと生態系の接続を認識することである。加えて、動物生理学を軸に生物多様性を学ぶことで生態系の有様から、「みんな違って、みんないい」という個々の存在に価値があるという認識を共有し、学生が次世代の地球人として人同士、人と動物の間において相互に認め合う社会をつくるための思考のプラットフォームを提供する。私が掲げる理念は自分自身が一個の動物であることを論理的に認識することで、自分も相手もヒト社会を取り巻く環境をも尊重する視点を学生に気づかせていくことである。

私達人間が普段認識していない「生きる」現象をイメージし、自身を反応する生命体として捉え直すことは、自己を生態系に属する一生命体であると認識することにつながる。ヒトは自身が生きていることを漠然と感じてはいるが、どのように「生きている」のかは学習し言葉にすることで初めて認識するものである。生物多様性の有様は、そのままヒトの社会の内部構造に相対して考える事ができ、またヒト社会をヒトとヒトの周りを取り巻く生物・環境と相互に織りなす生態系の一部として捉えることができる。この教育理念は大学が掲げる「地球共生系」という理念、すなわち「人間社会と動物社会および取りまく環境との相利共生社会の実現を目指す」という概念と方向性が一致する。自身の理念をより一般化した言葉にしていくことで、他の先生方の教育理念と融合させていくことが理想である。このような理念の実現のためには、科目単位の取り組みではなくカリキュラムや大学組織に至るような概念レベルで取り組み、近い理念を持つ方々と共に教育を作りあげていく必要性を感じている。

3. 教育の方法

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

理念の具体化のために、次の方針を示す。

- 1) 生理学の理解を助ける仕組みづくり
 - 2) 協働学習の構築 共に学ぶ学生へ
 - 3) 科学的思考力の育成
 - 4) 学生参加型授業の構築 自ら学ぶ学生へ
 - 5) インストラクショナル・デザインを用いた授業設計
 - 6) 精選されたDPに基づく学士力の育成（組織支援の観点から）
- 項目 1),2)は担当教育分野の理解を深めることを目的とした方針である。項目 3)～5)は項目 1)の取り組みや全学的な教育推進のための教育方法の実施方針である。

1) 生理学の理解を助ける仕組みづくり

生理学の理解を助け、より深い学修を促すための工夫を行う。生理学は個体の中で起きる反応が教科書に文章として記述され学生には生理現象をイメージとして捉えることが難しい。そのため身の回りにある例に置き換えて分かりやすく伝える授業コンテンツの工夫や、反転授業の導入、予習復習の工夫をすることで、より深い理解が得られるよう促す。また、調べ学習、リフレクション、チームディスカッション、学習コンテンツのチャンクダウン（スモールステップ化）により自ら学び進める授業づくりに取り組んでいる。

2) 協働学習の構築 共に学ぶ学生へ

1)を推進するための教育方法として、同級生と相互に補いながら学習を進めるためのグループワークやピア評価、TBL などの協働学習を行う。

3) 科学的思考力の育成

1)を推進するための教育方法として、生命科学系のアカデミック・ライティングの省察チェックリストを用いた段階的な論述訓練を行う。実験結果の記述や考察、グラフを用いた可視化に関するトレーニングを行う。

4) 学生参加型授業の構築 自ら学ぶ学生へ

1)を推進するための教育方法として学生による自己評価・相互評価を行う。実習科目ではチーム制の課題解決型テーマ設定を行う。研究指導では、卒業研究におけるテーマの主体的選択、学外共同研究者との交渉と連携などを学生主動で行う。また、実験計画と実施の自己管理および研究の自律的進行ができる自己管理能力の向上を目指す。授業には学びを振り返り認識するためのリフレクションを必ず設定している。

- ・授業内容に基づくグループでの動画製作と相互投票、アウトカム評価（獣医学概論）授業内容を基に3分間の動画をグループで製作し、相互投票で上位5作品をオンラインオープンキャンパスで発表する仕組みをつくった。

- ・労働生理学/労働生理学Iではチーム別のポスター制作課題を取り入れ、知識のアウトプットによる強化や相互学習による拡張的な学びを取り入れた。

- ・ジェネラリスト教育プログラム「オオサンショウウオの保全と地域の課題」において、学生と島根県のフィールドに赴き、オオサンショウウオ生態調査を行い、フィールドワークをとおした体験型の学びを提供した。

- ・ジェネラリスト教育プログラム「オオサンショウウオの保全と地域の課題」および研究室活動の一環として、岐阜県立大垣北高校との共催企画としてオオサンショウウオの解剖を行い、講演を担当した。4高校の生物部所属生と本校学生との交流の機会をもち、相互に刺激を与え合うことができた。

5) インストラクショナル・デザインを用いた授業設計

学生の学びのパフォーマンスを引き出すために、インストラクショナル・デザインの学習理論を用いた授業設計を行っている。

6) 精選されたDPに基づく学士力の育成（組織支援の観点から）

DPは高等教育機関における学士養成の方針として、組織を構成する大学教員の教育理念と深く関連する。学士力の成長にもっとも接続するのは各科目であるため、科目とDPのより密接な紐付けを学内会議に提案している。

（１）アクティブ・ラーニングについての取組

有

科目の内容に合わせ、反転授業、協働学習やペアセッション、学生間の相互コメントやTBL、プレゼンテーション制作などをコースに組み入れている。研究室における研究指導やジェネラリスト教育プログラムにおいてはフィールドワークや外部共同研究者との交流、学会発表を取り入れ、研究活動を通して学生が主体的に取り組む環境づくりを心がけている。

（２）ICTの教育活用

有

2020年以前からオリジナルデジタル教材を作製しLMSに掲載、小テストなどと組み合わせた反転授業コンテンツを提供している。遠隔授業や対面授業の授業サポート教材としてGoogleサイトによる授業ナビゲーションを設計、解説テキストや画像閲覧、講義動画視聴、LMS連携が1ページ視聴で完結できるように構築した。授業ではLMSやGoogleの各種サービスを適宜組み合わせたコースを提供している。全学教育支援として、LMS利活用のためのFDプログラムや練習コースを教員向け・学生向けに構築し提供している。

4. 教育の方法の改善・向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）教育（授業及び実習等）の創意工夫

A

実験モデルデータを用い、インストラクション付きエクセル解析シートを提供、エクセル入門者が基本的なグラフ作成を一人でできるような支援ツールを提供している。

（２）学生の理解度の把握

A

LMSの活動完了機能を用いた学習進捗の把握、理解度をはかる小テストスコアの確認、授業ワークシートの提出などを実施。

（３）学生の自学自習を促す工夫

A

予習復習プログラムを置き、それらのプログラムへ評点を与えることで、自律学習を促し、学びを深めるのためのペースメーカーとしている。
卒業論文の評価ルーブリックの項目を3年時の時点で指導学生に共有し、どのような力を意識して学ぶのか、各学生に考えてもらう時間を作っている。

（４）学生とのコミュニケーション

B

学生からの質問はメール、対面を問わず対応しているが、返信の追いつかない質問や、個別質問に対してクラス全体周知で対応、研究指導学生と十分なミーティング時間が取れないなど、時間的制約を感じることもあった。

（５）双方向授業への工夫

A

卒業研究での卒業論文製作をGoogleドキュメントで実施し、学生への即時フィードバックや共同編集での指導体制としている。ドキュメントは学生同士が相互閲覧できるようにし、ピア間の双方向性も確保している。クラス単位の授業では授業時間内外の質問受付、Learn Wiz Oneを使った授業内オンライン掲示板の運用による対話的授業、実習科目での対話も重視して取り組んでいる。

（６）国家試験対策の取組（獣医学科・臨床検査技術学科）

B

総合獣医学の講義資料の内容見直しや資料のリデザインによる情報整理を行なっている。

5. 学生の授業評価アンケート結果に基づく改善・向上の取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）授業評価アンケート結果の授業への反映

2018年頃に授業にインストラクショナル・デザインを導入後は授業評価アンケートは安定した評価を貰っている。自身で改善できると感じた部分はアンケートに書かれていなくても対応している。

（２）（１）の結果による改善・向上の具体的な成果又は課題

学習スケジュールの早期公開や、設問文・指示に質問をもらったときは資料や設問文の即時更新に努めている。

（３）（２）を踏まえた次年度の取組

学期開始時に学生ニーズを早期把握する

6. 学生の学修成果向上を図る取組

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

（１）現在までの学生の成績向上に資する取組及びその成果並びに今後予定している取組

講義形式の授業では、一方向授業にキーワード抽出やテキスト読解など、学生が自分で情報を抽出し整理するトレーニングを取り入れた授業づくりに取り組んだ。文章を書く力、データを解析する力、基本的なグラフを作成する力、それらを組み合わせたレポート作成など、DP1のみではなく、DP3や4の能力育成を意識したコンテンツや試験の作成に取り組んでいる。

（２）（１）の取組を通じて改善・向上が図られた学生の学修成果並びに当該取組に対して得られた学生及び第三者からの評価又はフィードバック

各学習コンテンツの工夫に対して、できないことができるようになった、その力が伸びたと思う、などの学生からのフィードバックを得ている。

7. 指導力向上のための取組（FD研修参加等）

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2025年2月

学内のFDにはできる限り参加、学外で開催されるFD研修会に積極的に参加し、教育力の向上や全学支援のための勉強を続けている。2024年は新たに学生相談学会に入会し、学生支援に関する勉強に取り組み始めた。

8. 今後の目標

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

短期目標

- ・ 教育成果の論文化（JSET, JSISE, 情報処理学会, 大学教育学会など）
- ・ AIを用いた自然言語処理技術の教育利用と実践
- ・ アカデミック・ライティング教育の取り組みによる「書ける学生」育成の土壌づくり
- ・ 大学教育の DX 化と対面授業との融合の最適化
- ・ 学生の学習成果可視化のための次世代 LMS 提案, およびラーニング・アナリティクス
- ・ 自身の情報アウトプットや発信力の強化
- ・ DP の精査の提案および DP と教育目標の紐付けによる学士力向上の支援

長期目標

- ・ 安定的に高い学生の学修効果が得られるような学修の仕組みづくり
- ・ 組織が主体的に高等教育推進に向かっていくための総合的支援
- ・ 教育現場の教育力の相互評価と協働が行える組織の土壌づくり
- ・ 長期的視点での自身のキャリアの目標を明確化し, 年度計画に落とし込み PDCAサイクルを回す。

9. ティーチング・ポートフォリオを作成する際に活用した根拠資料

対象期間：2024年4月～2027年3月

更新年月：2024年2月

- ・ 各科目のシラバス
- ・ 獣医生理学実習I 心臓機能に関する実験 予復習コンテンツ
- ・ 獣医生理学実習I 各ワークシート
- ・ 地球環境科学 クラスワークのスプレッドシート
- ・ 獣医生理学実習I, 動物解剖生理学実習 実習テキスト, 授業用Googleサイト
- ・ 研究室ゼミ発表記録
- ・ 研究室 Slack情報チャンネル
- ・ 学外研究者と学生の連絡メール (例)
- ・ 授業評価
- ・ 専門ゼミ 授業ワークシート, 研究活動振り返りシート, 授業議事録
- ・ 遠隔授業支援サイト (教員用, 学生用 学内向け)
- ・ Googleフォームを用いた試験マニュアル (2020年度 遠隔授業支援グループ)
- ・ 教員用AzaMoodle利用マニュアル (2021年度 教学IRセンター)
- ・ 学会発表要旨
- ・ アカデミックポートフォリオ作成WS修了証 (2022.3)
- ・ 大学院修了証 (2022.3)
- ・ e-Learning マネージャー・エキスパート・ラーニングデザイナー・eLPベーシック (eLC認定 e-Learning Professional) 資格認定証 (2022.4)
- ・ Researchmap <https://researchmap.jp/kumimatsui>